

## ラーニング commons の構想・運営・受容

### The Concept, Operation, and Acceptance of Learning Commons

学籍番号：201221599

氏名：松野 渉

Wataru MATSUNO

社会の変容、大学進学率の上昇などを原因として、日本の大学には大きな変化が訪れている。18歳人口の過半が高等教育に進学するというユニバーサル段階を迎えた日本の大学は、その社会的役割そのものが過去とは大きく異なるものとなっている。そしてそこで学ぶ学生の相対的な学力水準の低下が危惧されている。文部科学省が2008年に示した答申では「学士」の水準維持・向上に向けた提言が行われている。

大学図書館は近年、学修教育をいかに支援するかというミッションに直面している。その状況のもと近年急速に普及しているのが、ラーニング commons である。2013年現在、200館以上の大学図書館にラーニング commons に類するスペースが設置されている。

ラーニング commons の設置には、利用者のニーズを把握し、大学自体の教育とマッチングした計画を策定することが重要である。何故なら、大学の在り様が多様化している今日、学習支援をミッションとするラーニング commons は、全ての大学において一様ではあり得ない為である。しかし国内のラーニング commons の状況を調査する先行研究においては、この意図や計画について調査したものは見受けられない。

本研究では、我が国のラーニング commons がどのように構想・運営・受容されているかについて調査を行う。具体的な調査としては、文献調査などを基に選定した、ラーニング commons を設置・展開している大学および大学図書館八館の運営担当者に対して半構造化インタビューを行った。

その結果、ラーニング commons 設置の契機について、学内での必要性が先行している例と、資金や人事など、何らかの新規の取組みの為にリソース獲得が先行している例が混在している事、多くのラーニング commons で、人的な学習支援がサービスの要であり、場合によっては今後の大きな課題であると認識されている事などが明らかになった。

一方で、大学の教育理念なども含めて、何故いまラーニング commons が自大学に必要なのかを検討した上で設置された、いわばコンセプト先行型のラーニング commons が出現しつつある事も明らかにする事が出来た。

本来ラーニング commons は、そこでどのような形の学習支援に取り組むかが十二分に検討された上で設置されるべきものであるが、国内の事例ではラーニング commons を設置することのみに重きが置かれがちである。大学・大学図書館が今後より一層厳しい状況を迎える事になる中で、我が国のラーニング commons が、より一層コンセプトや計画を重視し、その運営にあたってどのように学習を支援するかについて十分検討される事が期待される。

研究指導教員：逸村 裕

副研究指導教員：大庭 一郎